

鳥獣保護管理プランナー

赤座 久明

富山自然博物館 ねいの里

対象鳥獣

ツキノワグマ

活動地域

富山県

（富山市庵谷地区）

● 事業内容

集落内のカキの木伐採による生息環境管理

■ 事業の背景

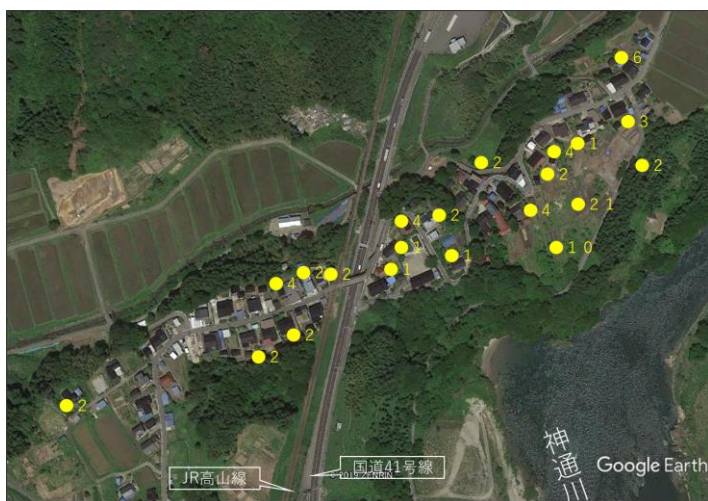
富山県ではブナ、ミズナラ等の堅果類の凶作年の秋に、ツキノワグマが人里へ出没し人身被害が発生する事が多い。人里へのクマの出没の最大の理由は、堅果類が凶作のため、代替食物として集落内に多く生育するカキの実を採食する事にある。2004年の大量出没の際に捕殺された28頭のクマの胃内容物からカキの実が出現する頻度は65%にもなり、多くのクマが集落内のカキの実を求めて山から里へ出て来たことが分かった。一方、野生動物の被害対策としての生息環境管理は実施後の効果が確認しづらく、対象地が広く時間や費用がかかるため、組織的、計画的な実施がなされないままであった。

■ 実施した内容

2019年9月下旬に、富山市南部の中山間地である庵谷地区の住民から依頼を受けカキの木を点検したところ、新しいクマの痕跡が確認された。このままカキの実を放置しておく、以後、毎晩クマが庭のカキの木に接近する事が予想されたため、依頼者と相談し、庭に数本あるカキの木の实をすべて除去し、近所の民家にも声をかけて付近のカキの実を全て除去した。その後、庵谷地区の全世帯を対象にして、希望する世帯のカキの実を除去する実行計画を作り、全世帯に通知した。

伐採作業はチェーンソーの操作ができる10人の自治会役員が交代で実施し、カキの木76本とクリの木2本の合計78本を伐採した(図、写真)。なお、日当についてはクマ出没という自然災害を未然に回避するための自治会の公共事業と位置付け、作業参加者に対し自治会会計から時給1000円を支払った。伐採依頼者の費用負担が無いため、伐採作業が進むにしたがい、伐採を依頼する世帯も増加し、集落内から多くの不要果樹が無くなった。

多くの世帯がカキの木を伐採する事にあまり抵抗なく同意した理由として、老人の多い地区住民には巨木になったカキの木を管理できない状態になっていた事、時代と共に農山村の食習慣が変わり、丁寧に摘果して利用する事が無くなった事が考えられる。クマ対策のためのカキの木伐採は2019年から継続して実施しており、3年間で100本以上のカキの木が集落内から取り除かれ、集落内へクマやサルを誘引する原因を取り除くことができた。



伐採作業の詳細

- ・9月～11月の7日間で実施
- ・21か所のカキの木など78本
- ・10人が138.5人・時の作業
- ・日当138,500円
- ・伐採のコスト 1,776円/本

※図内の数字は伐採した本数

図 富山市庵谷におけるカキの木の伐採箇所（2019年9月～11月）



写真 住民による伐採作業

事業の成果

（1）庵谷地区の状況

2019年および2021年において、近隣の7集落における秋（9月～12月）のクマの目撃数は、2年間に1件以上目撃された集落が5集落あったが、カキの木を積極的に伐採した庵谷集落の目撃事例は無かった。一方、カキの木を伐採する以前の2010年の大量出没年には、庵谷地区でも日中に集落内のカキの木に登っている1件の目撃事例があったことから、伐採後は庵谷地区ではクマが出没しにくい環境に変わったと考えられる。地区の裏山の雑木林に新しいクマの痕跡が見られることから、裏山にはクマが生息するものの集落内へは出てこない状況であると思われる。

（2）周囲への波及効果

クマの出没対策としてのカキの木の伐採とその効果を富山県に報告し、その後度々新聞やテレビ等で報道された事もあり、県が2020年に「クマ被害防止緊急対策事業補助金」として予算化を行った。カキの木等の伐採費用の1/3を県が補助金として交付し、残りを市町村と地元自治会が負担するという内容で、この制度を使い新たに4市がカキの木の伐採を計画、実施した。また、国による補助金の利用や、市町が単独で事業化した場合も含めると、2021年には県内15市町村のうち11市町がカキの木の伐採を実施し始めた。

（3）成果

これまで野生動物の被害対策として最も実施が困難であった生息環境管理の方策について、「クマを集落内へ誘引するカキの木を伐採する」という、分かりやすい目標を示すことができるようになった。それにより、「何処のカキを、何時迄に、何本伐採するのか、それに必要な資金はどれだけか」、という具体的な行動計画を立てることができ、その結果クマの出没、痕跡情報がどれだけ減少したか、という効果測定も可能になった。小さな集落で始めたクマの出没対策が、県や市町村挙げての対策に繋がった。